

平成24・25年度熊本県教育委員会指定

平成24・25年度菊池市教育委員会指定

環境教育研究推進校・学力向上研究指定校

# 研究紀要

感性を育てる環境教育のあり方

～七城らしさを生かして～



平成25年11月8日（金）

菊池市立七城小学校

## はじめに

地球環境の実態は、一般に知られているよりはるかに深刻であると言われていています。ごみ問題、地球温暖化、オゾン層破壊、森林破壊、生物種の絶滅、人口爆発と貧困、食糧問題、水資源の危機、砂漠化等々。私を含めてすべての人が、これらの被害者になると同時に加害者になる危険性を持っています。

そのような中、この夏、環境に関して学ぶ機会がいくつかありました。

一つ目は、水俣で行った職員の現地学習です。水俣の海は、果てしなく青く美しく広がっていました。この海で数十年前公害が起り、多くの人命が失われ、今もなお病気や差別により苦しんでおられる人がいる。そのマイナスの教訓と真正面から向き合い、もやい直し、環境のまちづくりに立ち上がった人々がいる。水俣市の元市長である吉井正澄氏が言われた「教育が世の中を変える」、その言葉に報いるためにも、学校総体で水俣について学ばなければならない、心からそう思いました。

二つ目は、九州各県から集まった先生方による環境教育の研修会で気づいたことです。熊本県が県全体で取り組んでいる「水俣に学ぶ肥後っ子教室」や「学校版環境 ISO」等の取組が、他県に類を見ない素晴らしい取組であるということです。環境問題を全国に先駆けて解決する責務が、熊本に生きる私たちに課せられていることを改めて認識しました。多忙、慣れ等の理由から、マンネリ化、行事の上塗りになっていたのではないかと、強く反省させられました。

三つ目は、持続可能な社会を形成する取組は、今始まったわけではないということです。20年に1回遷宮を行う太宰府天満宮では、それまで使われていた材木を別の場所に加工して使う取組が当初から続いているそうです。リサイクルの知恵が、先人の知恵でもあったこと。今私たちが行っている取組もまた、後世に確実に受け継ぐ責務があることを痛感させられました。

本校の取組は、「感性を育てる環境教育のあり方」の模索です。学校経営や学級経営の軸に「環境」を据え、目標達成のためにグランドデザインを描いて確実な実践を行うこと。前述した地球環境の実態と七城の環境を結びつけて学ばせ、実践に繋ぐななしろ型環境学習を直接的、間接的に行うこと。校舎内外の物的環境や学校版環境 ISO 等を工夫し、見えないカリキュラムを具現化すること。そのベースには基礎学力の充実を置き、環境に関する知的理解、心、実践的態度をはぐくむことをめざしてきました。その中で、見えない育ちを見ようと、発達段階に応じて具体的な行動目標を定め、PDCA サイクルにおける評価も可能にしてきました。

しかし、研究はまだ緒に就いたばかりです。「児童の成長の実感を通して、児童自身、教職員、保護者、地域の方も笑顔になろう」、その合い言葉を環境というフィルターを通して実現することは、そう簡単なことではありませんでした。ただ、手応えを感じていることも事実です。本日の発表会が、今後の更なる取組に繋ぐ機会になればと願っています。忌憚のない御指導・御助言そして協議を賜ることができれば幸いです。

最後になりましたが、本研究の充実に向け、御指導・御協力を賜りました熊本県教育委員会、菊池教育事務所、菊池市教育委員会、関係各位に心から感謝申し上げます。

平成25年11月  
菊池市立七城小学校長 緒方 登志子

# 目 次

## ◆ はじめに

### I 研究の概要

---

1	研究主題	1
2	研究主題設定の理由	1
3	研究主題について	1
4	研究の仮説と方向	3
5	研究の柱	4
6	全体構想図	6

### II 研究の実際

---

1	環境を軸に据えた学級経営のグランドデザイン化	7
2	実践化に繋がる「ななしろ」型環境学習の創造	9
3	子どもの感性を育てる環境の創造	15
4	基礎学力向上の取組	17

### III 研究の成果と課題

---

1	研究の成果	19
2	研究の課題と方向	20
3	まとめ	20

## ◆ おわりに

# I 研究の概要

## 1 研究主題

# 感性を育てる環境教育のあり方 ～七城らしさを生かして～

## 2 研究主題設定の理由

社会全体・・・持続可能な社会の構築  
最小限の環境負荷 資源の循環 主体的な環境保全

**背景** 子どもたちの育ち・・・地域の大人との交流の場の減少、自然体験の減少  
人間関係の希薄化、集中力や耐久性の欠如

優しく 賢く たくましい 七城っ子の育成  
[経営のキーワード]  
～児童の成長の実感を通じた児童、教職員、保護者、地域の方の笑顔～

**本校教育目標**

**本校の実態** 平成24年度末、環境問題についての知識は身につつつあるが、子どもたちの実行力は不足しているということが課題として指摘されていた。子どもたちにとって、環境問題は遠い問題であり、菊池川・迫川流域にオヤニラミなどの絶滅危惧種がいること、また、その数が極端に減っていることを知っている児童は、ほとんどいないことがわかっている。

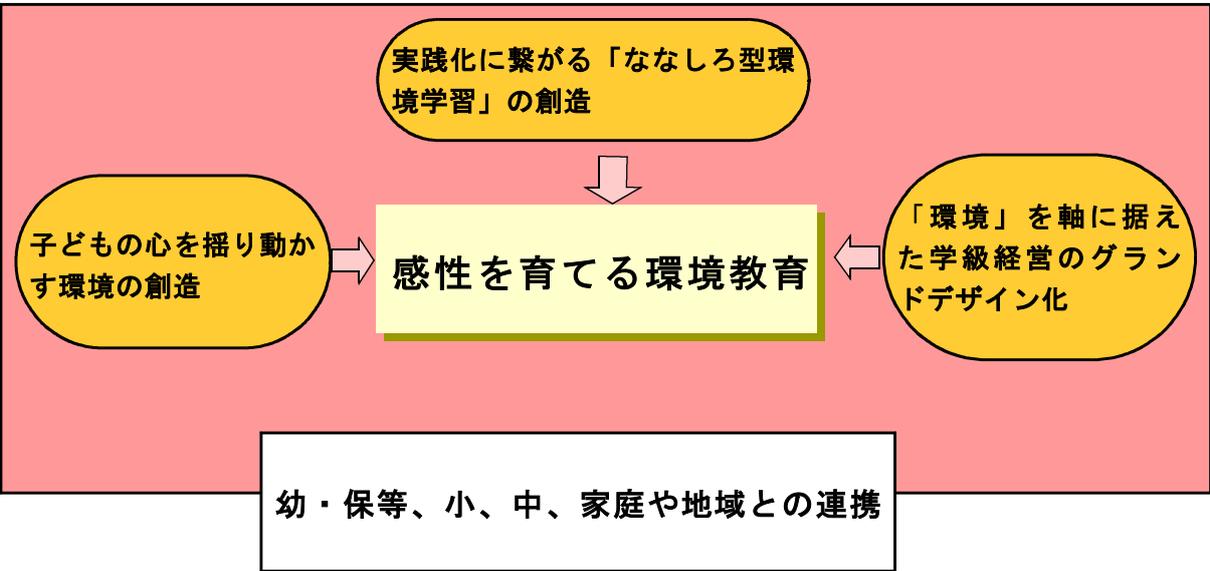
[児童の実態：平成24年6月のアンケート結果より]

- ・七城が好き。(95.4%)
- ・環境問題を知っている。(30.7%)
- ・身近な環境問題に気づく。(47.1%)

[これまでの取組] ○幼・保等、小、中連携に関する実践研究 ○「ななしろ」型学習の推進

## 3 研究主題について

(1) 本校では、「感性を育てる環境教育」に次のように迫りたい。



(2) 「感性」に関する本校の考え方

本校では環境教育で育てる「感性」を次のようにとらえる。

各教科、道徳、特別活動など学校全体の教育活動全体で環境教育を推進し、育てていく「感性」とは、「身近な環境や自然と人とのかかわりについて理解を深めるとともに、環境や自然に対する思いやりやこれらを大切にすることを育み、さらに自ら率先して環境を保全し、よりよい環境を創造していこうとする実践的な態度を育成すること」と考える。

国立教育政策研究所教育課程研究センター  
環境教育指導資料[小学校編]参照

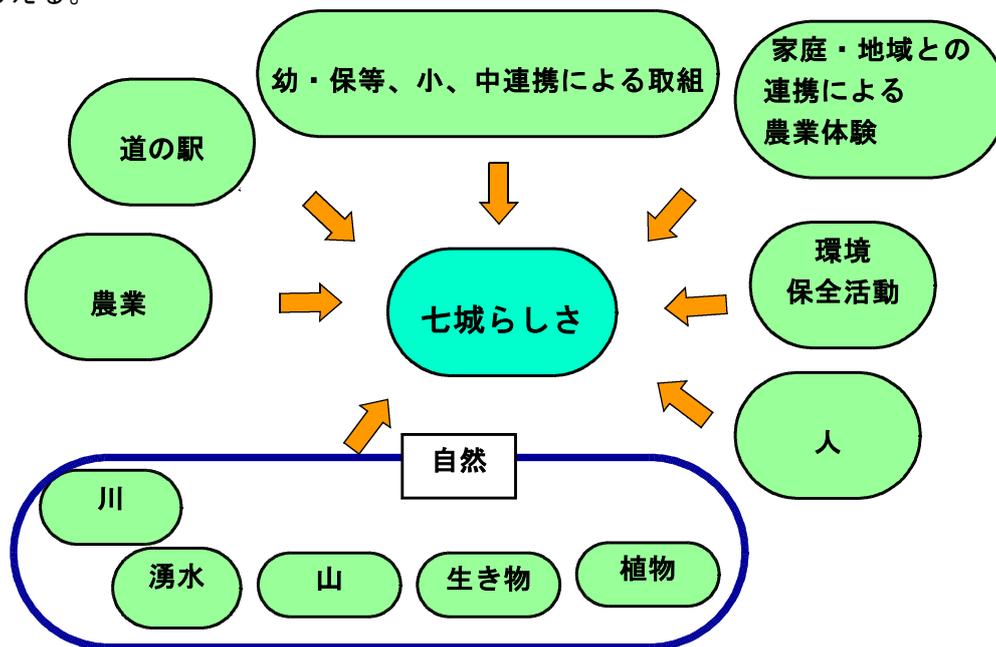
このことから本校が環境教育を通して育てたい力を次の通りとする。

- ① 身近な環境や自然と人とのかかわりの理解
- ② 環境や自然を大切にすること
- ③ 進んで環境を守り、よりよい環境を創造しようとする実践的態度

	低・中・高学年で育てたい力	具体的な行動目標 ◎：重点項目
身近な環境・自然・人とのかかわりの理解	低：身近な環境や自然とのかかわりに関心を持ち、自然の素晴らしさに気づく力。	◎課題に気づき、「ななしろ」型環境学習をつくる。 ◎各教科の基礎的・基本的事項を85%の児童が確実に理解している。
	中：自分たちの生活が環境と深く結びついていることに気づき、より良い生活環境を考える力。	◎課題に気づき、「ななしろ」型環境学習をつくる。 ◎基礎的・基本的事項を85%の児童が理解している。
	高：自分や集団と環境とのかかわりに気づき、見通しをもって身近な環境について多面的に考える力。	◎課題に気づき、見通しを持って「ななしろ」型環境学習をつくる。 ◎各教科の基礎的・基本的事項を80%の児童が確実に理解している。
環境や自然を大切にすること	低：身近な自然や動植物を大切にしようとする。	◎1人1鉢、学級園のお世話を100%できる。 ◎小動物の世話を、当番を中心に100%できる。
	中：身近な動植物や自然を愛し、責任をもって大切にしようとする。	◎学級園、じゃがいも、タマネギ畑の世話を当番を中心に100%できる。 ◎すべての友だちに「～さん」をつけて呼ぶ。
	高：自ら考え、判断し、実行しようとする力。 人・自然・動植物など生命あるものすべてを大切にしようとする。	◎「時と場をわきまえた」行動（あいさつ・廊下歩行・時間厳守・集団行動）が100%できる。 ◎学級園・学校田の世話が100%できる。 ◎すべての友だちに「～さん」をつけて呼ぶ。 ○異学年との交流を進んで行う。
実践的態度	低：身の周りの環境を良くするために、自分ができるところを進んで行う。	◎100%の児童が掃除の仕方を理解し、きれいになった喜びを味わうことができる。 ◎友だちと仲よく助け合って、係活動を毎日忘れずに行う。
	中：地域の環境の良さに気づき、それを保全するために自分たちにできることを考え、実践する。	◎節水に100%の児童が取り組む。 ◎校外活動時に、地域の自然環境を守るための清掃活動を行う。
	高：校内の美しい環境をつくるために主体的にかかわる。 地域の環境の保全活動等にも自ら参加しようとする。	◎委員会の常時活動を忘れずに100%行う。 ◎「時間いっぱい、すみずみまで、進んで」掃除できる。 ○地域の自然環境を守るための清掃活動に参加する。 ○地域行事に積極的に参加する。

(3) 「七城らしさ」とは

本校では地域の人・もの・自然・伝統など地域のよさそのものを「七城らしさ」ととらえる。



4 研究の仮説と方向

[仮説1]

幼・保等、小、中、家庭や地域と連携し、「環境」を軸にすえた学級経営のグランドデザイン化を行い、見通しを持ってすべての教育活動において計画的に環境教育を進めることで、環境に対する児童の感性が育つであろう。

[仮説2]

環境学習の視点を明確にし、七城町のよさを味わうような「ななしろ」型環境学習に取り組むことで、環境に対する児童の感性が育つであろう。

[仮説3]

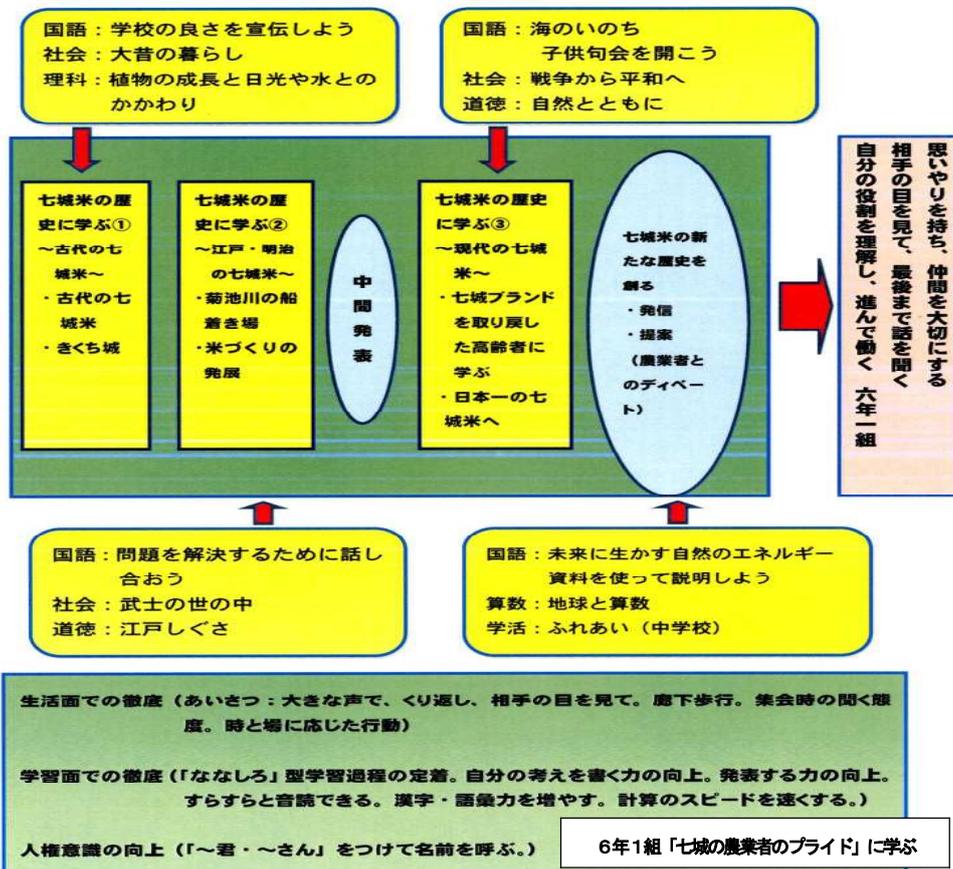
子どもとともに学校・学級花壇、芝生、校舎内外の潤いのある環境をつくり、環境に関する掲示を充実させるとともに、学校版・学級版・家庭版・地域版環境ISOの取組を工夫し、推進することで、環境に対する児童の感性が育つであろう。

5 研究の柱

(1) 研究仮説に迫るために、次の3つの柱を設ける。また、基礎基本の定着・徹底を研究の基盤とする。

「環境」を軸に据えた学級経営のグランドデザイン化	実践化に繋がる「ななしろ」型環境学習の創造	子どもの感性を育てる環境の創造
①発達段階に応じた目指す子ども像の設定と学級内評価による具現化 ②環境教育年間計画の整理 ③より効果が期待できるグランドデザインの作成 ④ PDCA サイクルによる学級・学年における環境教育の確実な実践	①地域環境教材の発掘 ②環境教育の視点の明確化 ③発問の工夫 ④終末の工夫 ⑤実践化評価 ⑥すべての教育活動における「ななしろ」型学習の推進 ⑦全校で取組む「水俣に学ぶ 肥後っ子教室」の推進	①学校版、家庭版、地域版、環境 ISO の取組の工夫 ②子どもとともに創る学校・学級花壇、芝生、校舎内外の潤いのある環境づくり ③環境に関する掲示設営等の充実
学習における基礎基本の定着・徹底		
朝自習の取組      業間活動の充実      家庭学習の取組		
幼・保等、小、中、家庭や地域との連携		

(2) 「環境」を軸に据えた学級経営のグランドデザイン化とは、次の通りである。



昨年度、本校で作成された環境教育年間指導計画を基に、より効果が期待できるデザインに作り直す。

各学級で取り組む環境教育の中心となる学習活動を明確にする。さらに、その核につながる各教科・領域との関連と指導時期をはっきりとさせる。

このように環境教育を軸に据えたグランドデザインを描くことで、環境教育を確実に実施していくことができる。

また、学級目標をゴールとすることで取組ごとの評価もしやすくなると思う。

(3) 環境教育年間計画の整理

本校では、平成15年度から2年間「幼稚園・保育所・小学校連携に関する実践研究」が行われ、平成17年度からは、中学校までを含めた 幼・保等、小、中連携の取組が進められてきた。

幼・保等、小、中連携による環境教育の取組とは、交流活動だけではなく、環境教育を通して育てたい力を共通理解し、これまで幼稚園・保育園、小学校、中学校で行ってきた環境教育を整理するとともに、情報を共有し合いながら、それぞれの発達段階で責任を持って取り組んでいくことと捉える。

(4) 本校では幼・保等、小、中が連携し、「学びのものさし」に取り組んできた。授業では「ななしろ」型学習が共通実践されている。

本校の環境教育で推進する「ななしろ」型環境学習を次のように考える。

「ななしろ」型環境学習	
「ななしろ」型環境学習のキーワード	教師のかかわり
なぜだろう？	① 地域環境教材の発掘 ② 環境学習の視点の明確化 ③ 発問の工夫 ④ 終末の工夫 ⑤ 実践化評価 ⑥ すべての教育活動における「ななしろ」型学習の推進
なにか一つ自分の考えを持とう	
しっかり伝え合おう。	
振り返ろう。かかわろう。	

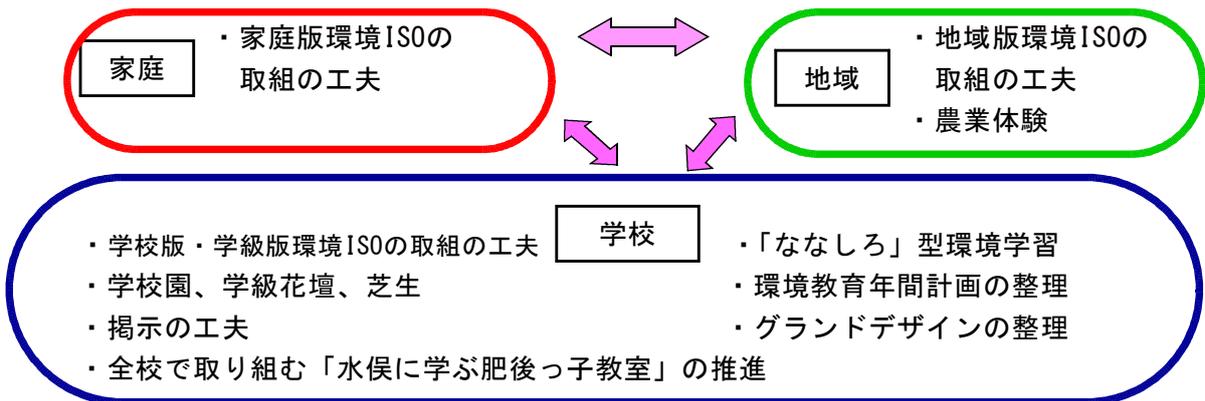
(5) 本校では、環境教育の視点を次のように考える。

環境教育の視点	
【感】豊かな感受性	すべての環境に関する事物・現象に対して、興味・関心を持って、意欲的にかかわろうとする。
【命】生命尊重	生命の尊さを感じ取り、生命あるものすべてを大切にしようとする。
【身】身近な環境	学校・家庭・地域など身近な環境や様々な自然、社会の事物・現象の中から、問題を見つけ、解決しようとする。
【態】多様性・生態系	自然の中には様々な生物がいることを知り、生物とそれを取り巻く環境とのバランスを考えようとする。
【循】循環・有限性	限りある資源を大切にし、リサイクルや再利用などを進め、循環型社会の実現をめざそうとする。
【保】環境保全	身近な環境や様々な自然を大切にし、より良い環境をめざそうとする。

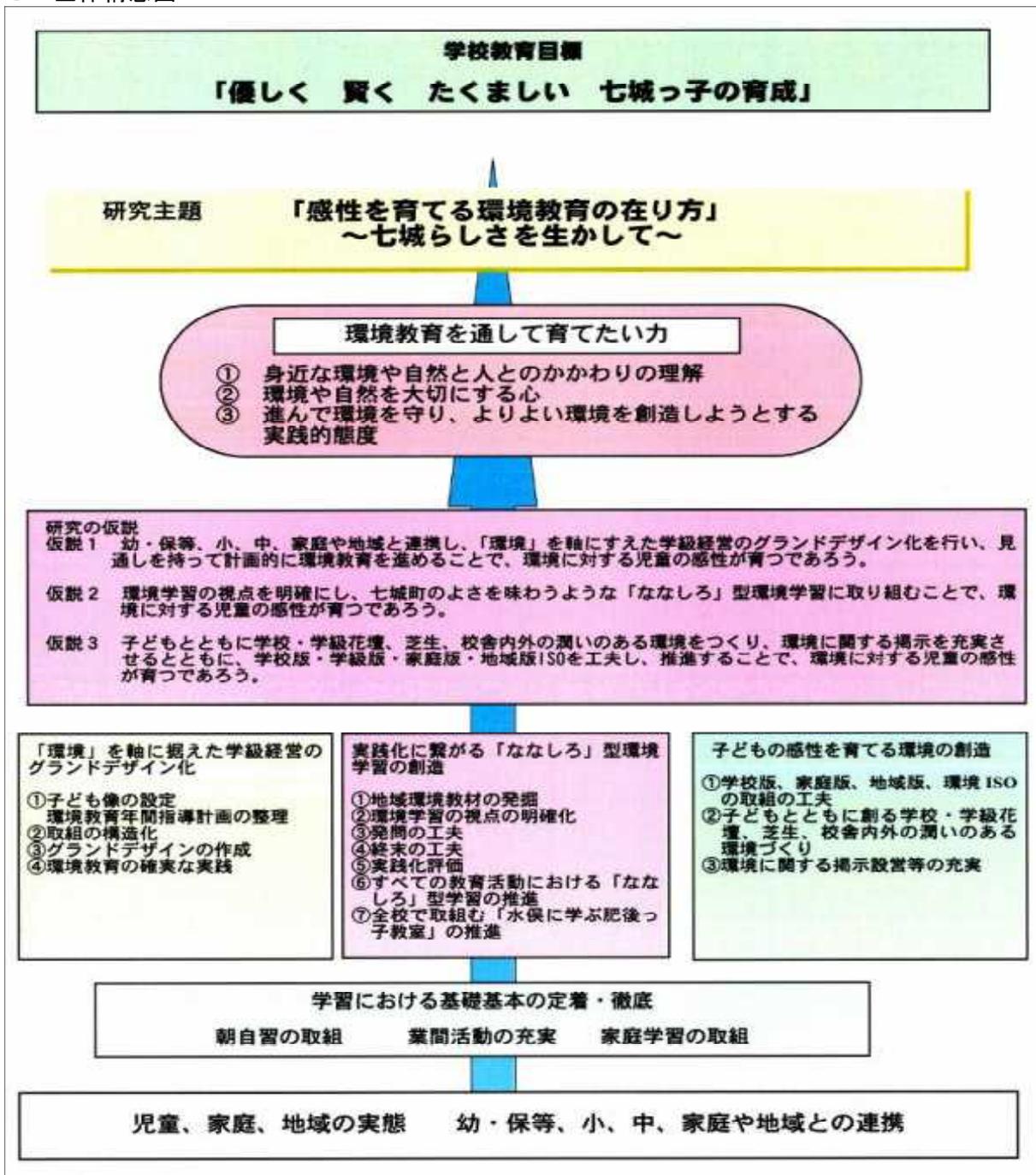
熊本県教育委員会環境教育指導資料

「学校における環境教育の一層の充実」参照

(6) 子どもの感性を育てる環境の創造



6 全体構想図



## II 研究の実際

### 1 環境を軸に据えた学級経営のグランドデザイン化

#### (1) 幼・保等、小、中連携の取組

本校の児童のほとんどは地元の4園の保育園、幼稚園を卒園し、本小学校へ入学してくる。また、その後、七城中学校へ進学する。この恵まれた環境の中で、幼・保等、小、中が連携し、保護者や地域に支えられながらふるさと七城を大切にする態度をはぐくんでいる。本年度は連携のテーマを「環境」におき、これまでの環境の取組をふり返るとともに発達段階に応じた取組を確実にやっていくことを共通理解した。その一部を紹介する。

清泉保育園エコキャップ回収運動



加茂川保育園グリーンカーテン栽培



双羽幼稚園のサツマイモの苗植え取組



砦保育園キュウリの栽培



七城中学校の取組 花苗ポット移植、道路へ花の苗植え



このように幼保等で育てられた環境を守っていこうとする意識や態度を中学校へつなげられるように、小学校の取組を進めていきたい。

#### (2) 環境教育年間指導計画の整理

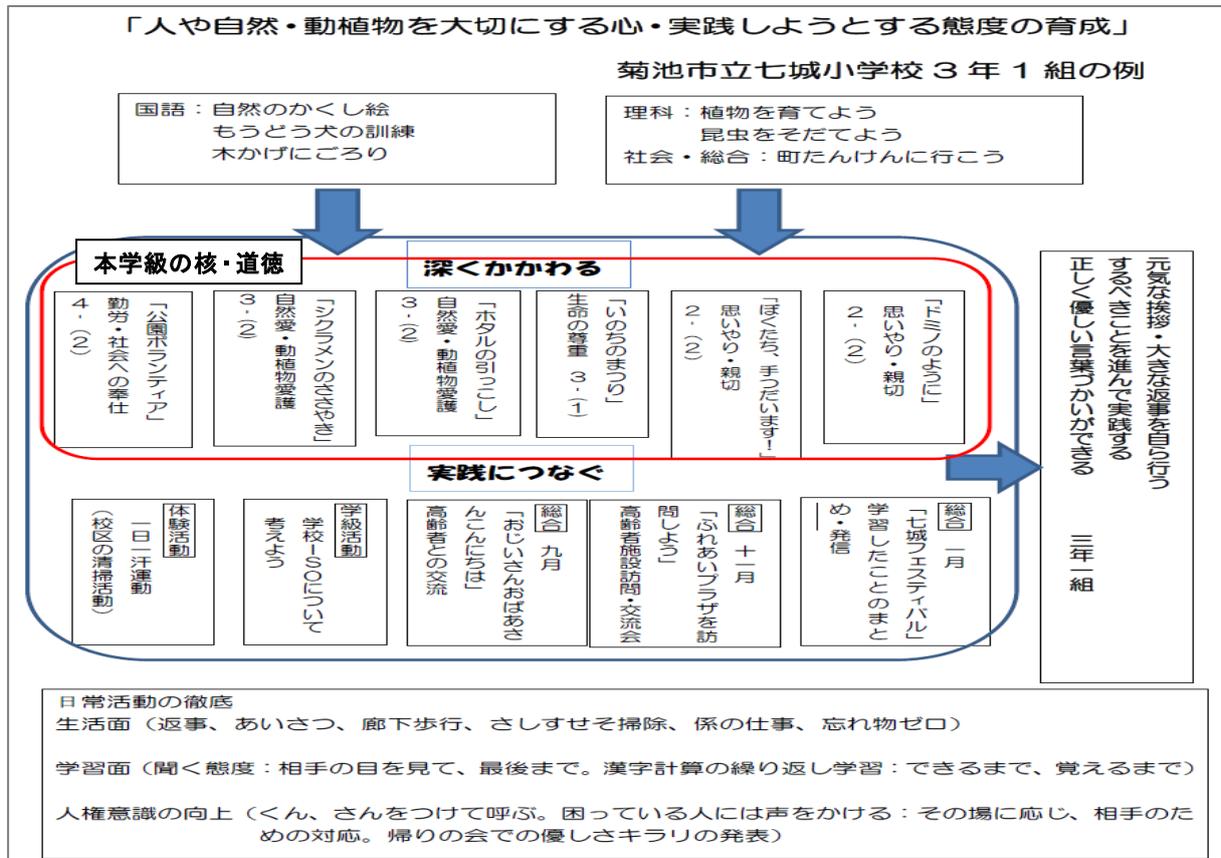
5年						
月	国語	社会	算数	理科	ななしろ	音楽
4	【感】動物の体と気候 【環】環境によって動物の体形等が変化する事	【感】日本にはなぜ四季があるの 【環】日本の気候の特色		【保】天気の変化 (中国大陸から雲が来ること)	【感】じゃが玉の引き継ぎ (雑草の管理・芽かき)	
5	【身】ゲストティーチャーをすいせんしよう (栽培委員さん等)	【環】住みよいくらしと環境 (環境に合わせた暮らし)	【身】体積 (ボールの体積を知ろう) 【算】小数×小数 (ケナフの高さ比べ)	【命】植物の発芽 (気温が植物の発芽に影響すること) 【保】植物の成長 (成長には日光が関係していること)	【感】種まきの準備をしよう (塩水選・無農薬・無肥料)	【感】このぼり (春の空に力強く泳ぐ鯉のぼり)
6	【環】新聞記事を読み取る (アユについての記事)	【保】農業のさかんな地域をたずねて (自然を生かした農業)	【身】式と計算 (ユリとマリーゴールドの花壇の面積を求める。)		【命】苗床で稲を育てよう (水の管理・田植えの準備)	【感】いつでもあの海は (海の豊かさ)
7	【環】立場を明確にして書こう (環境についての意見)	【環】水産業のさかんな地域をたずねて (とる漁業・育てる漁業にはげむ人々)	【身】合同な図形 (ペリカンの絵作図)	【命】メダカのたんじょう (水の中には小さな生物がいて、めだかやほかの魚などの食べ物になっていること)	【保】田植えをしよう (田の管理・稲の成長の記録)	
8	【保】詩と俳句を味わおう (パネル討論しよう) (環境を守るために)		【算】整数 (花瓶に花をあまりなく分け)		【保】田の管理 (草取り、水の管理、稲の成長の記録)	
	【感】資料を鑑ん	【保】これからの食糧生産		【命】植物の芽のつくりと葉や種子	【命】すずめよけ	【感】おれけ梅

環境教育は特設の時間を設けなくても教科や領域の学習の中で多様な学習が確実に可能である。環境に関する内容がどの単元で可能なのかそれぞれの教科・領域でピックアップした。その一部を抜粋したものが左の環境教育年間指導計画である。

環境教育年間指導計画

(3) 実効性のあるランドデザインの作成

具体的には、次のように年間を見通して核となる教育活動を学級ごとに設定し、ランドデザインを作成した。



(4) PDCAサイクルによる学級・学年における環境教育の確実な実践

学級、学年でランドデザインによる環境教育の授業や体験活動を行った後、学級目標やめざす子ども像を評価し、次の実践につなげていくことで、確実な実践につながるようにした。

本校では、5年生による米作りを継続して行っている。子どもたちは年間の活動の後（次年度当初）、劇や図を使い、自分たちの活動を振り返り次の学年に伝えていく。引き継ぐ内容を考える過程で、前年度うまくいったこと、もっと配慮すべきだったことを振り返り、さらによい活動になるようにポイントをまとめている。子どもたち自身の言葉でまとめ、伝えていくことで5年生にとっても6年生にとっても確実な実践につながっている。



＜6年生から5年生への米の引継ぎ式の様子＞

## 2 実践化に繋がる「ななしろ」型環境学習の創造

### (1) 地域環境教材の発掘

#### ① 第4学年 総合的な学習の時間の実践 「七城 命を支える自慢の水」

##### ア 単元の価値

「七城の水をきれいにしよう」という目標のもと、七城の水とふれあう水遊びや水質調査、農作物の生産活動などを通して地域のよさを十分に感じることができるような実践化を図った。また、目上の方や小さい子に対する態度や言葉遣いなど体験しながら徹底させることができるようにした。

##### イ 単元計画 【環境の視点：身近な環境】

月	教科との関連	活 動 内 容
6月	社会 水はどこから →水の保身に つながる単元 国語 伝えたいことをはっきりさせて書こう → <u>お礼文</u> を書き地域の人とつながる力を高める単元	○「七城 命を支えるじまんの水」について調べる計画を立てる ・七城の川の様子 ・水利用の方法 ・田畑の様子 
7月	社会 私たちのくらしと水 →水環境につながる単元 理科 生きものを調べよう(夏) → <u>川の生き物調べ</u> につながる単元 国語 わたしの考えたこと → <u>レポート・報告書</u> にまとめ、発信する力を高める単元	川の学習 ○GTと川の学習 ・校内で ・前川水源で ・鴨川公園で  ○川についてまとめよう。 ・前川水源の水のきれいさを保ったり、鴨川公園をもっと美しくするためには… 
2月		○七城の川や水について発信しよう。

七城町の川って  
きれいなんだな。

どんな生き物が  
いるのかな。

川には、いろんな  
生き物がいるね。  
七城の川は、きれいなこ  
とがわかったね。

### 成果と課題

○川の水生生物の調査を通じたことで、七城町の川の水質がきれいであることを再確認した。

G Tの協力を得たことで、質問の仕方等を徹底することができた。

●課題設定の工夫が必要だった。G Tとの打ち合わせの時間を確保し、どの場面でかかわってもらうのかを話し合っておく必要があった。

② 第6学年1組 総合的な学習の時間の実践  
「七城の農業者のプライド」に学ぶ ～七城米の歴史に学ぶ～

ア 本時の目標

古代米と七城米、他の地域の米を食べ比べる活動を通して、味の違いに気づくとともに、七城米を軸とした課題を設定することができる。

イ 研究主題に対して

**仮説1について** 七城米に関する課題づくりを通して、七城米を軸に据えたグランドデザインを子どもとともに作り、主体性を育成する。

**仮説2について** 古代米と七城米、他の地域の米を食べ比べる活動2回取り入れる。名称がわからない状態で食べ比べる1回目の活動後、米の名称を示し、2回目の食べ比べをさせる。子どもたちのなぜだろうという疑問を引き出し、課題設定につなげる。

ウ 授業の概要 【環境教育の視点：環境保全】

過程	学習活動及び 教師の関わり (T)	児童の反応 (C) 成果 (○) と課題 (●)
な	<p>1 古代米、七城米、タイ米の写真を見る。 T：課題作りへの関心を高めるために、写真のみを提示する。米の名称は子どもたちに知らせない。 T：一人一人に考えを持たせるため、一人学びからスタートする。</p> <p>2 本時の学習のめあてを知る。</p>	<p>C：色が違う。 C：自分たちが育てた米とちがう。 ○3枚の写真を通して、5年時の米作りの活動を振り返ることができた。学習意欲の向上につながった。</p>
3 種類の米を食べ比べて、課題を見つけよう。		
な	<p>3 1回目の食べ比べをし、気づきをワークシートにまとめる。 A：古代米 B：七城米 C：タイ米 T：味の違いに焦点化することで、子どもたちの自由な感想を引き出す。 T：出された感想を板書し、2回目の食べ比べにつなげる。 T：3種類の米の名称を知らせる。</p> <p>4 3種類の米の名称を知り、2回目の食べ比べをする。なぜだろうという疑問をワークシートにまとめる。 T：子どもたちから出された疑問を単元の課題設定へとつなげていく。 T：疑問が書けない子への手立てとして、ヒントを書き込んだワークシートを用意しておく。</p>	<p>C：Aの米は堅い。 C：Bの米がうまい。 C：Cの米は香りがあるぞ。</p> <p>○米の食べ比べを通じたことで、食感や味に対して一人一人が気づきを持つことができた。</p> <p>C：やっぱり七城米はおいしい。なぜだろう。 C：タイ米には、どうして香りがあるのだろう。 ○体験活動を通すことで、一人一人が疑問を持ち、課題設定へとつなげることができた。 ●環境教育、国際理解教育等の視点で検討し、選択した。しかし、食べ比べという表面的な学習活動だけで気づかせるには無理があった。 ●食べ比べを2回行ったことで、後半の時間が不足し、課題の整理の時間が足りなくなってしまった。</p>
し	<p>5 個人の課題を3人グループで出し合い、整理する。 T：整理の視点を与え、課題の価値を考えさせ、課題設定力を高める。 T：話し合いの司会は交代で行うことで、コミュニケーション能力の基礎を育成する。</p> <p>6 整理した課題を黒板上でグルーピングする。 T：3つのキーワードでグルーピングする。 ア 七城米を支える環境 イ 地球環境 ウ 生産者の思い</p>	<p>C：どうして七城米はおいしいのだろう。 C：米をつくるのは、大変だろうな。 C：おいしい米を育てるには、何が必要なんだろう。</p> <p>【評価】 七城米を軸とした課題を設定することができた。</p> <p>●時間が不足したため、教師主導の整理になってしまった。キーワードへのつながりが不十分だった。</p>
ろ	<p>7 七城米を支える環境（水・土・気候）を持続させるために自分たちができることを行っているかを振り返る。 T：七城米を支える環境（水・土・気候）を持続させるために、学校版環境ISOの取組から自分たちの生活を振り返らせ、実践化に繋げる。</p>	<p>○学校版環境ISOの取組から自分たちの生活を振り返り、その改善点に気付くことができた。 ●時間不足のため、自分たちができることを自分の問題として考えさせることができなかった。 ●学校版環境ISOが十分に児童に徹底されていないことが課題であった。</p>



成果と課題

- 3種類の米を食べ比べる体験活動を通じたことで、子どもたちの学習意欲が高まっただけでなく、一人一人がしっかりと自分の考えを持つことができた。
- 学校版環境ISOの取組から自分たちの生活を振り返ったことで、その改善点に気付くことができた。
- 食べ比べを2回行ったことで、時間が不足し、後半の活動が浅くなった。

③ 第3学年1組 道徳の実践 「自然の大切さ ホタルの引っこし」

ア 本時の目標

自然の大切さに気づき、自然や動植物を大切にしようとする態度を育てる。

イ 研究主題に対して

**仮説2について** 今までの自分の体験、社会や総合的な学習の時間で取り組んでいる町探検の学習との関連を図り、七城町には豊かな自然が存在していることに気づかせる。昨年の体験活動で行ったホタルが生息する前川水源周辺の水の様子を、写真を使って思い出させ、資料の中の出来事が身近な問題であることに気づかせる。

**仮説3について** これまでの自分の行いを振り返ることを通して、自分の体験の中に自然を大切にしている価値のある行いがあるか振り返らせ、実践の原動力にする。

ウ 授業の概要 【環境教育の視点：環境保全】

過程	学習活動及び 教師の関わり (T)	児童の反応 (C) 成果 (○) と課題 (●)
な	1 ホタルはどんなところに住んでいるかを出し合う。 T: ホタルの写真を提示し、前川岩瀬の水の様子を思い起こさせる。	<b>C: 前川水源の写真だ。 C: 水がきれいなところ</b>  ○2年生で行った体験活動を想起させることで、資料が身近なものとなった。
な	2 資料「ホタルの引っこし」を読んで話し合う。 (1) 心に残ったところを発表する。 T: 児童が主体的に参加するように、児童の心に残ったことを中心に学習を構成していく。 (2) 悪い水が流れてきたときの魚たちの気持ちを考える。 T: 人間が出した生活排水や殺虫剤が原因で、水が汚れたことをおさえる。 (3) ドジョウの切実な気持ちを考える。 T: ドジョウの怒りは誰に向いているのかを考えさせ、ねらいに迫る。 T: 「我慢できない」という言葉からドジョウの切実な気持ちと人間にその原因があることに気づかせる。 (4) ホタルたちが引っこしていくときの気持ちを考える。 T: グループで書いたことを交流し合う。 T: 自分の住んでいたところを離れて、新しい場所に行こうとするホタルたちの悲しさやつらさ、不安な気持ちを捉えさせる。	<b>C: 悪い水が流れてきて川を汚すところです。 C: 「ドジョウが引っこした。もう我慢できない。」と言ったところです。 C: ホタルたちが一斉に飛び立ち引っこしをすところです。</b>   <b>C: 嫌な臭いだ。息苦しい。 C: 前はきれいな水だったのに。 C: 人間が出した水がいけないんだ。</b>  <b>C: このままでは死んでしまうから、引っこすのは仕方がない。 C: ほかの生き物もいるんだ。人間は勝手だ。</b>  <b>C: ここを離れるのはつらい。でもここじゃ生きられないから仕方がない。 C: 川上はきれいな。 C: うまく行き着くといいけど。 C: 心配だなあ。また住みづらくなるかもしれないよ。</b>
し	3 自分たちの生活を振り返る。 T: 地域の環境が汚されているような現状を、写真を使って振り返らせることで、自分たちの行動に気づかせるようにする。さらに、子どもたちに環境保全の必要性を訴えたい。	<b>C: ごみが草むらに落ちていても拾っていないかったな。 C: 枝や花を折ったりしたこともあったな。 C: 魚をおみやみに取って遊んだりしているな。</b> ○写真を使った振り返りは、子どもたちの心情に強く訴えるものがあった。
ろ	4 自然や自然の動植物を保護するために、活動している人の話を聞く。 T: 七城町でもホタルがいなくなったことをおさえ、身近な問題であることを確かめる。 T: 七城町の自然や動植物を守るために長い間尽力している人がいることをおさえる。	<b>C: 七城のホタルも一回は消えてしまったんだな。 C: 地域の方は、ホタルがまた生きられる川になるようにいろいろな努力をしてくいたんだな。</b>  ○地域でホタルの飼育活動が行われている岩崎さんの話をビデオ視聴した。必要な話に絞り込んで活用することができた。 ●G Tの話の中で、子どもたちに考えさせる視点が必要だった。

成果と課題

- 身近な自然の写真や地域の方のインタビュー映像を使ったことで、題材を身近に感じることができた。
- G Tの話の中で何を子どもたちに考えさせるか、視点を絞ることが必要だった。
- 登場する生き物と出会わせることや生き物が身近にいる環境づくりを工夫することで学習がさらに深まったように思う。

(2) 学校版環境ISOの日常化

第2学年1組 図画工作科の実践 「ぶかぶか ゆらゆら」

① 本時の目標

ペットボトルや身近な道具を実際にさわりながら、容器をつなげたり飾りつけたりすることで、自分の作りたいものをイメージし、形として表すことができる。

② 研究主題に対して

**仮説2について** 互いのよさや感じたことを素直な心で認め合い、友だちの表現したかったところを理解する。

**仮説3について** 以前の図工で残った材料や、学校生活での廃材をリユース銀行に保存しておく。児童はいつでも必要な資源をとりに行くことができるようにし、今後のリユースのきっかけ作りとする。工作後の後片付けの際に、ゴミと資源を分別する活動を通して、学校版環境ISOの実践的な態度を育成する。

③ 授業の概要 【環境教育の視点：循環性・有用性】

過程	学習活動及び教師の関わり (T)	児童の反応 (C) 成果 (○) と課題 (●)
な	1 前時の振り返り・本時のめあてを知る。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                     ペットボトルの上に、もっと ようきをつなげたり、かざりつけたりしよう。                 </div>	C: まだ作りたい。
な	2 中間発表をする。 T: 造形活動の根底にある思いを確認するために、自分のイメージを伝え、それを肯定される活動を行う。 T: 前時の机間指導中に、教師側からも児童が工夫したと見られる点に肯定的な声掛けをして意識付けした状態でスタートする。 T: 中間発表の他に、作っていて困ったことはないか班で話し合わせる。	C: 私はこの難しいところを接着剤で付けるのをがんばっています。 C: モールをつけるにはどうするんですか。 C: ここがゆらゆらするのは、どうしたらいいですか。 ○全体で困ったこと話し合う活動を通して、問題点を共有し、協力した作品作りにつながった。 ●発表に広がりをもたせるため、事前の準備に十分な時間を確保する必要があった。
し	3 更に飾りをつなげたり広げたりする。 T: 作り方や工夫点を友だちと話し合いながら作品を形作る。  4 作品を紹介する。 T: 浮かべたときの動きをイメージしながら工夫できている作品を紹介する。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                     ゴミを分別しよう。                 </div>	C: ここはどうしよう。つなげようかな。 C: はさみで穴をほがしてみました。 【評価】 自分の思いをもとにペットボトルの上に容器をつなげたり飾りつけたりできる。  ○困ったことを班の中で話し合いながら、工夫して作品づくりができていた。 C: 私モモールでつなげたい。 C: 棒人間がゆらゆら揺れて動いてみたい。 ●前時に十分製作時間を確保し、ある程度完成させておく必要があった。
ろ	5 片づけをする。 T: 「ステンジャー」を紹介し、ゴミの分別への意欲を高める。 T: 教師はゴミ箱の前に立ち、捨てる前に一言声を掛けてどこに捨てるか考えさせる。 T: 分別後に本時でどれほどのゴミが出たのかを確認する。  6 本時を振り返り、次時へつなぐ。 T: 作ったものを実際に浮かべてみる日時や場所を具体的に伝え、今後の制作意欲を高める。	C: これはまだ使えるからリユース銀行に入れてもいいですか。 C: 先生これはどうですか。 C: これまだ使えるから、(捨てたら) もったいない。使いたい。 C: これ使えるかな。 ○ステンジャーの言葉を思い出して、分別に気をつけて片付けることができた。 ○捨てた後も、もう一度確認をして使えるものと使えないものを分けることができるようになった。 ○捨てる前に使えるかどうかを相談することができるようになった。 ●「使いたい」気持ちが強くと、分別せずに持って帰ろうとする児童がいた。

成果と課題

○廃材を利用した作品づくりを通して、それらが、まだ使えることに気づくことができた。

○分別を意識した片付けを通して、ものの循環性に気づくことができた。

●製作の時間を十分に確保できなかったために、中間発表に広がりがなかった。

### (3) 全校で取り組む「水俣に学ぶ肥後っ子教室」

#### ① 5年生の取組

##### ア 「水俣に学ぶ肥後っ子教室」

6月4日、5年生を対象に「水俣に学ぶ肥後っ子教室」を実施した。

事前学習として総合的な学習の時間や家庭科の学習において、水俣の公害の原因や影響、取組などについて、写真や資料などをもとに調べ、現地訪問学習に向けた課題を設定した。道徳の時間には、「この子とともに」の教材により、水俣病にかかった人やその家族が苦しんだ差別について正しく知り、その人たちのつらさや差別に立ち向かっていく強さについて考えてきた。

当日は、資料館での前田恵美子さんによる講話や交流により、水俣病と向き合い、たくましく明るく過ごしている姿が子どもたちの心に残った。また、事前に学習してきた土台の上に、水俣病に対する児童の正しい認識などを積み上げることができた。

移動教室後、児童の関心・意欲が高まり、自主学習で、学んだことをまとめたり、水俣に関する新聞記事を自発的に集めたりする姿が見られるようになった。

今後、水俣病に関する新聞記事やニュースなどを取り上げながら、環境に対する意識を更に高めるとともに、水俣病に対する差別を見抜き、許さない態度の育成も図っていききたい。また、水俣市の環境都市としてのもやい直しから、自分たちの生活を自分たちの力でよりよく築いていこうとする実践力の育成にも力を入れていきたい。

##### イ 田植え

5年生はこれまで、どんな米づくりをするかの協議に始まり、塩水選、種もみ選び、苗床作りと、栽培員さんの指導のもと、すべてを自分たちの手で米作りを続けてきた。栽培員さんの思いは、米づくりを通して子どもたちの育ちを応援することである。

7月1日には5年生を中心に、全校をあげて田植えを行った。夏休み中にも当番を組み、見回りやお世話を進めてきた。また、米作りをする中で、田んぼの水がどこから来ているのかを調べるなど、校区の水環境について関心を高めることにつながった。

##### ウ つながる水俣と七城

9月には総合的な学習の時間に「水俣の米づくりを探る～環境都市としての水俣の姿」をテーマに、水俣における稲刈りや、販売、収穫祭などの調べ学習を行った。

具体的には「七城と水俣をつなぐ」をテーマに、水俣の袋小学校とインターネットによるテレビ会議を行った。本会議を通して、互いの米づくりについて発信し、提案し合うことができた。また、互いの米づくりについて実践を交流することにより、それぞれの地域らしさや環境問題に対する議論を行うことができた。

袋小学校と双方向の交流を行ったことで、自分たちの暮らす地域のよさを新たに再発見した。さらに、袋小学校の環境保全の取組は、「大切な海（環境）を未来につなげる」ためのものであることに気づき、環境問題についての切実な思いを実感することができた。



水俣病資料館での見学の様子



前田恵美子さんによる講話

## ② 全校での取組

### ア 環境ウィーク

昨年度の反省として、「水俣に学ぶ肥後っ子教室」が5年生のみによる単発的なものになってしまったことがあげられる。本年度は5年生から発信し、全校をあげて水俣について学習することに重点をおいた。そこで、9月の5年生による「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の報告発表後、環境ウィークを設定し、全校をあげて水俣を基盤として環境について考え実践する期間を設けた。環境ウィークの目的は以下の3点である。

- ①全校で発達段階に応じた目指す子ども像に基づく「水俣に学ぶ」環境学習を実施することで、環境に対する意識を高める。
- ②学校版環境ISOを日常化することで、環境に対する実践力を高める。
- ③学力の向上を図ることで、判断力や多面的に考える力等を高める。

各学年による発達段階に応じた「水俣に学ぶ」環境学習では、それぞれ学年ごとに「水俣」をテーマに授業を行った。児童一人一人が「水俣」の問題を自分のものとして考えることができた。それぞれの発達段階に応じたねらい、取組内容は次のとおりである。

学年	内 容
6年	環境が人間に与える影響について考える。また、水俣病から環境都市へと復興した水俣を通して、原爆から復興した長崎のひとびとのたくましさや重ね、自分たちの暮らしに取り入れることを考え、行動につなぐ。
5年	「水俣に学ぶ肥後っ子教室」成果発表（児童集会） 水俣市立袋小とのテレビ対談第一回目（学校及びふるさとの紹介）
4年	環境と川の中の生き物の生態についての学習を通して、川の環境を守るためにできることを考え実践につなぐ
3年	七城町の川や道路などの清掃活動を通して、ふるさとの環境を守ろうとする態度を育て、実践の継続につなぐ。
2年	水の循環性・有用性を伝える絵本の読み聞かせを通して、水を大切にしていこうとする態度を育てる。
1年	絵本の読み聞かせ（水・魚）を通して、環境についての関心を高める。

### イ 教職員による水俣現地研修



全校で「水俣に学ぶ肥後っ子教室」を推進していくにあたり、教職員も水俣についての理解を深めようと、7月30日に教職員による水俣現地研修を行った。実際に現地に足を運び、地域の人々の思いに触れ、水俣病と今の水俣の取組を学びなおすことで、水俣病問題について正しく知ることができた。水質汚染を中心に環境問題について、発達段階に応じて子どもたちに考えさせたいことを認識することができた。

### ウ 教職員による全員研修



教職員による全員研修として、前水俣市長 吉井正澄氏を講師に招き、「環境のまちづくりで学んだこと」というテーマで講演会を実施した。

水俣病発生の地というマイナスの個性をプラスに変えた環境モデル都市「水俣」の取組について学ぶことができた。その取組が市民に自信と誇りを与え、もやい直しが生まれ、環境を軸とした水俣の再生へとつながったことを再認識した。

### 3 子どもの感性を育てる環境の創造

#### ① 学校版、学級版、家庭版、地域版環境ISOの

#### 取組の工夫

環境美化委員会を中心に全校での取組を進めてきた。昨年度は、「節電・節水・ゴミの分別」の3項目を重点に学校版環境ISOの取組を推進した。しかし、節電や節水に対する意識の高揚に課題が残った。本年度は、低学年にもわかるように具体的なものを取り入れ、見やすいものへと工夫した。

また、情宣活動に力を入れ、昼の放送で2週間毎日呼びかけをしたり、環境美化委員会による児童集会でキャラクターを使った呼びかけをしたり、全校に馴染み深いものとなるように工夫した。



平成25年度 七城小学校環境ISO

**1 3R運動をすすめていきます。**

- リサイクル…給食の牛乳パックをトイレットペーパーに、ペットボトルのキャップをワケチンに変えます。
- リユース…もう一度使える物は、くり返し使います。
- リデュース…給食の食べ残しを減らします。落し物を減らします。(持ち物には名前を書いて大切にします。)教室の紙ごみはリサイクルボックスに入れます。

**2 節電・節水を心がけます。**

- 無駄な電気は消します。
- 水道は、小指ぐらいの太さで使います。
- ぞうきんは、バケツで洗います。
- はみがきは、コップを使います。

**3 環境を守る活動を積極的に進めていきます。**

環境美化委員による学校版環境ISOの情宣活動

七城小学校 環境ウィーク ザ・チャレンジ1週間 保護者名( )

**「家庭版環境ISO」活動に 取り組んでみましょう!**

家庭でも環境にやさしい活動を☆ 9/17(水)~9/23(月)

家庭で一つでも二つでもよいので、1週間やってみてください。

項目	9/17(水)	9/18(木)	9/19(金)	9/20(土)	9/21(日)	9/22(月)	9/23(火)
1 使わなくなったものをリユース	○	○	○	○	○	○	○
2 水や電気を節約する	○	○	○	○	○	○	○
3 お家ではリサイクルボックスに入る	○	○	○	○	○	○	○

「家庭版環境ISO」活動に、取り組んでみた感想

項目(記入例)

- 取り組みの開始は、二学期に決まりました。
- はみ出し物の分別は、大変難しいです。
- 節約の意識を、家庭で広げたいです。
- 白紙類、空き缶、空きビンなどは、リサイクルに出す。
- その他

取り組みのまとめ

取り組みだより

9/24(火)に、子どもさん(親子)に持たせてください。

「学校版環境ISO」(1)3R…リサイクル・リユース・リデュース (2)節電・節水 (3)環境を守る活動

※学校版環境ISOとは、「子どもたちが自ら考え行動することで、環境にやさしい心構えを育てるとともに、環境保全活動や環境問題の解決に主体的にかかわらうとする態度や能力を育成する」ことを目的としています。家庭や地域でも、環境にやさしい活動を広げていきましょう。

家庭版環境ISOの取組

学級版環境ISOについては、学校版をもとに、それぞれの学級の課題を浮き彫りにした上で決めていった。家庭版環境ISOは、それぞれの家庭で努力できそうなことを考えてもらい、取り組んだ。地域版環境ISOは、七城町の各地区でこれまで取り組まれてきたことを、区長さん方に御協力いただき、さらに推進してもらおうと考えている。

#### ② 潤いのある環境づくり

子どもとともに創る花壇や芝生などの校舎外の環境、また、校舎内の環境に関する掲示設営などを工夫した。そのことで、身近な環境や自然と人とのかかわりについての理解、思いやり・大切に作る心、実践的な態度が育っていく。

地域版環境ISOの取組



くまモンを形どった中庭の芝生  
夏の暑さを3℃下げると言われている



運動場の手入れをしている  
ボランティアの6年生



環境を意識する掲示物

### ③ 児童会活動

環境を守る活動を、1つの委員会（環境美化委員会）だけの取組にせず、すべての委員会が積極的に取り組むために、委員長による環境サミット（G9）を行っている。

環境サミットは、環境に関して、「自分たちにできることは、ないだろうか。」と考え合う会議であり、「他の委員会の意見を尋ねてみよう。」という諮問機関ともなっている。

この会議を開くことで、すべての委員会で、環境を守る活動を主体的に考えることができるようになった。それを各委員会に持ち帰り、それぞれ実践することにより、全校児童の環境への意識を高めている。



#### 環境に関する各委員会活動案

委員会名	活 動 案
企画運営委員会	・七城小環境サミットを開催し、各委員会の取組みのまとめ、紹介
体育	・走れ走れ運動の前に石拾い・ライン引き（運動場の環境を整える。） ・体育倉庫、一輪車倉庫の整理整頓、掃除
人権 ボランティア	・ペットボトルキャップを一年間で50kg収集 ・学級にペットボトルキャップ回収ボックスを配布
栽培	・七城ガーデニングカップ（一人一鉢、学年花壇、お世話） ・植えた花の紹介（放送と掲示）。 ・児童集会で栽培に関する劇を披露 ・校内の花壇やプランターの整備
環境美化	・学校版環境ISOの取組を進める。
生活	・ごみ拾い、草取り ・節電、節水の点検 ・持ち物に記名することの呼びかけ
給食	・残滓調べ（残滓0をめざす。） ・牛乳の飲み残しチェック（廊下や階段などに牛乳がこぼれないように声掛け） ・ストローの袋調べ（パックについていないかチェック）
保健	・トイレのスリッパ並べチェック ・コップ調べ、けが調べ
歌声放送	・節電を呼びかける放送（昼の放送）
図書	・空き箱などでのしおり作り ・新聞紙でエコバック作り ・環境に関する本の整理、展示

#### 4 基礎学力向上の取組

基礎学力向上に向けた取組は、本校の学力の実態から必要な取組である。そこで、全校で共通理解をし、実践を行った。

##### ① チャレンジタイムの活用（毎週火曜日、木曜日の朝の時間（8：25～8：40））

チャレンジタイムとして、言語感覚を磨き、表現力・思考力の向上を図ると共に計算力の向上を図る取り組みの内容は、次の通りである。

- ア 論語の音読と暗唱
- イ 群読、児童集会・七城フェスティバルで発表
- ウ 新聞を活用した意見文作成
- エ ゆうチャレンジの問題活用
- オ 学力テスト対策
- エ 学校応援団による基礎学力向上

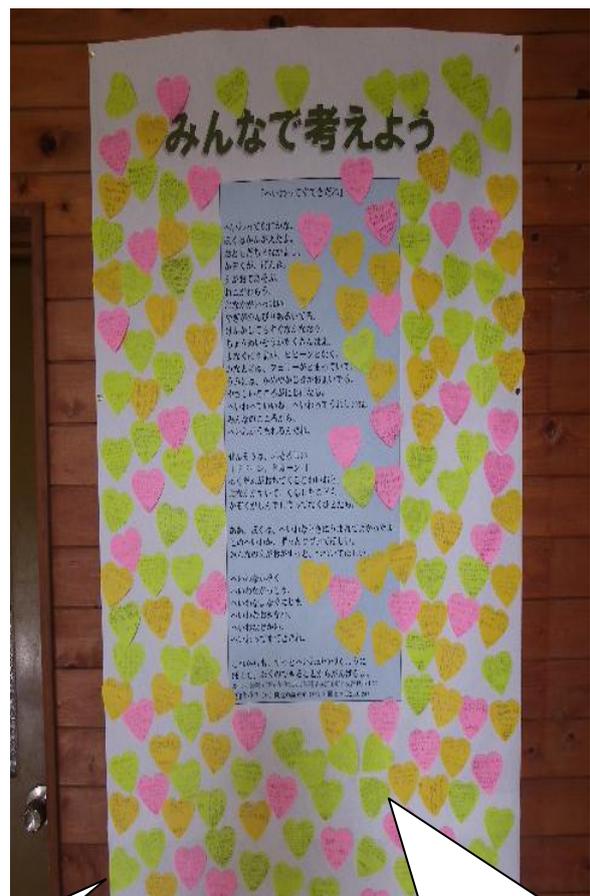


年間計画を立て、表現力・思考力という本校児童の課題を克服しようと取り組んで3年目に入る。ことばあそびや、詩だけでなく、今年、論語に取り組んでいる。みんなで一斉に、声に出して言うことを通して、皆で声をそろえることの心地よさや、声を出して発声することの楽しさを感じ取らせること、発表の音が小さく発表の苦手な子どもの発語への抵抗を和らげることを目指している。並行して、論語を学ぶことで、本校児童の課題である規範意識を身につけさせる機会としている。教室に掲示して隙間の時間にも教室で群読している。

また、NIE教育の一環として、新聞を活用した意見文を作成して、子どもたちの意見交換の場とした。低学年棟に1年から3年生の意見文、高学年棟には、4年から6年生の意見文を書いて掲示した。右は、全校児童で「平和について」考えたものである。

環境教育に関する新聞記事では、「世界の宝、富士山を守ろう」としてその課題について考えた。世界遺産になることが正式に決まった直後だけに児童の関心も高く「価値あるものだから大切にしていきたい。」「入山料は、富士山をまもるためには必要なお金だと思う。」等の意見が聞かれた。

タイムリーな話題を選びそれを題材として、読み、考え、意見をまとめることができるように取り組んでいる。



新聞を読んで、戦争ってこわいなと改めて思いました。そして、自分の家族の遺骨を探しても見つからず、墓に入れてあげることができないのは、なんて悲しいことかと思いました。

戦争があるとたいせつな人を失う。このことで悲しみが生まれる。この悲しみを繰り返すのはいやだと思う。だから、戦争はしたくない。

② わくわく読書（第4火曜日のチャレンジタイム）

読解力を身につけ学力を伸ばすために読み聞かせを行っている。

本校には、毎月2回の地域ボランティアくれよんくらの読み聞かせがあるが、担任が交替したり七年部が担当したりして読み聞かせを行い、様々な視点から本のおもしろさを伝えている。



いつもどちがって いろんなせんせいにおはなしのほんをよんでもらったよ。こんどは、どんなせんせいかな。

③ 七城小学校家庭学習の手引き

菊池市版家庭学習の手引きを参考にして、家庭学習の時間、内容、態度等、七城版家庭学習の手引を作成し各家庭に配布した。

低学年の時から、家庭学習の習慣化を図り、3年生以上は、内容を工夫した効率のよい自主学习ができる手立てとなるように工夫した。

保護者の声

家でどのくらい勉強させたらいいか、学習の目安になって、参考にすることができました。自学も、こんな勉強したらどう？と手引を見て、アドバイスできました。

④ 計算大会・漢字大会（7月、8月、10月、12月、1月、3月に実施）

学習への意欲を高め、漢字力計算力の向上を図るために、チャレンジタイムの時間を使って行い、大会後は、認定証に記録して保護者に知らせる。計算大会や漢字大会が近付くと、全員90点以上を目指して、自学する子どもが増えている。

⑤ 児童集会（毎月第2火曜日プレイタイムの時間）

10の各委員会の活動内容の発表や全児童への呼びかけを行う。子どもたちの自主的な活動の発表の場を通して委員全員が活躍する。このことにより児童がいろいろな仕事を引き受けやり遂げるところでもあることを学ぶ機会となっている。

6月の集会の発表は、保健委員会が担当した。

6月4日は、虫歯予防デー。虫歯になる原因を低学年にも分かるような劇の発表や、保健委員会が調べた虫歯の数調べやクイズ等、工夫を凝らした内容だった。



ほくは、歯磨きがめんどくさいと思って、さっさとすませていました。食べたら、ていねいにみがいて、むし歯を作らないようにしたいと思いました。

劇を作るのはたいへんだったけど、歯みがきの大切さが1年生にもわかってもらえて、うれしかったです。発表したことを、ほくも、がんばっていこうと思いました。

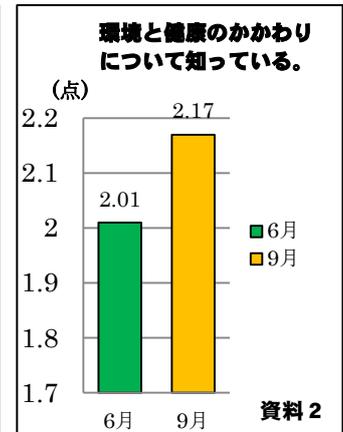
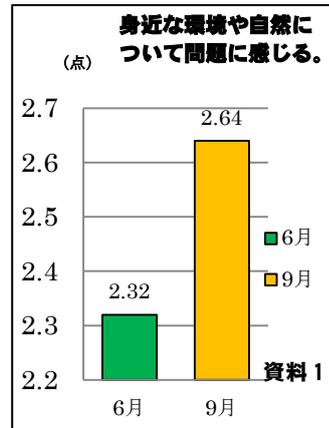
### Ⅲ 研究の成果と課題

#### 1 研究の成果

##### <仮説1>環境を軸に据えた学級経営の ランドデザイン化

○身近な環境や自然の環境の問題に気づかない子どもが多かったため、環境を軸に据えた学級経営のランドデザインをつくり、見通しを持って、環境に関する学びを繰り返し重ねてきた。そのことにより、身近な環境の問題に気づくようになり、環境や健康、人のかかわりについての知的理解がわずかに高まった。

資料1 資料2



##### <仮説2>実践化に繋がる「ななしろ型 環境学習」の創造

○身近な環境や自然について気づく力の弱さは、子どもたちの受身の学習につながっていると考え、「ななしろ」型環境学習を推進することにした。子どもたちの課題発見力は若干高まりを見せている。

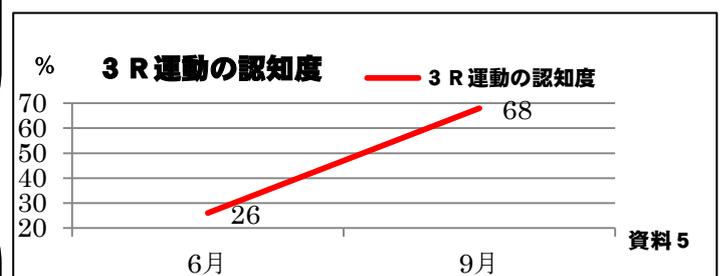
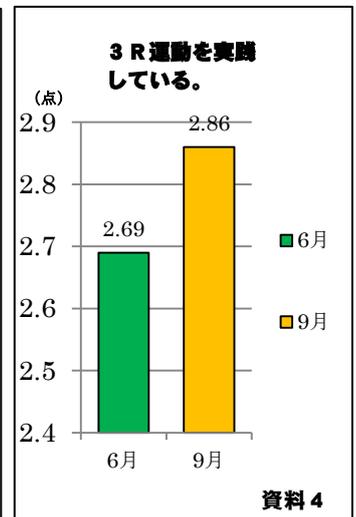
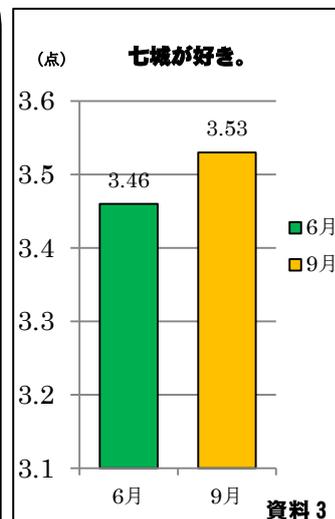
資料1

○地域環境教材を発掘し、子どもたちに積極的に学ばせたことにより、七城が好きと回答した児童の評価がさらに高くなった。

資料3

○知識はあっても、実践力が不足していたことが平成24年度の課題であった。そこで、「ななしろ」型環境学習の終末に、学校版環境ISOの取組から自分たちの生活を振り返る活動を設定し、実践に対する評価を行った。そのことで、学校版環境ISOの取組の一つである3R運動の実践力がわずかであるが向上した。

資料4



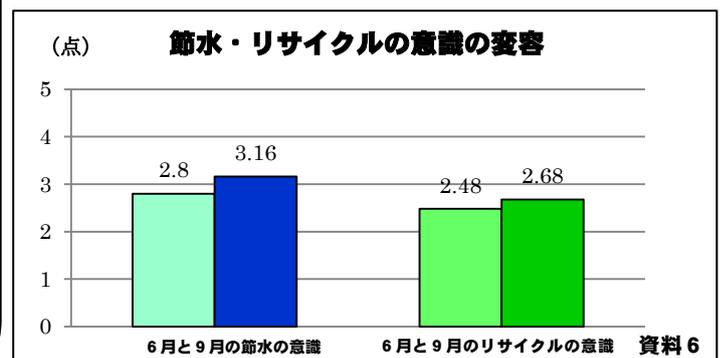
##### <仮説3>子どもの感性を育てる環境の 創造

○学校版環境ISOの取組の一つである3R運動の認知度が低かったが、委員会によるPR活動、学校版環境ISOの授業での活用、リユース銀行等の工夫により3R運動の認知度が大きく高まった。

資料5

○節水やリサイクルの意識が高くない児童が多かったため、学校版環境ISOを子どもたちが確実に実践できる項目に改善し、エコキャラクターを活用したことで、節水・リサイクルの意識が若干ではあるが高まった。

資料6



## 2 研究の課題（●）と方向（① ② ③）

### ● P D C Aサイクルによる振り返りの弱さ

全体的に変容はみられるが、児童の伸び幅が小さいことが課題の一つとしてあげられる。この理由として、「振り返りの時間を設けていなかった。」担任が全体の72.7%を占めることから、グランドデザインのなかに振り返りの活動が位置づけられていなかったことがあげられる。何ができ、何ができなかったのかが改善されないまま活動を進めたことが原因と考える。職員全体で共通理解をする時間をもっと設ける必要があった。

→ 方向① グランドデザインに評価の場を設定する。

### ● 「ななしろ」型学習の推進

子どもたちの問題に気付く力や知的理解の高まりが少なかった。この理由として、『すべての教育活動で「ななしろ」型学習の推進が不足していた。』と回答した担任が全体の45.5%を占めたことがあげられる。子どもが主体的に学習を進めるよう、授業を改善していかなければならない。

→ 方向② 授業改善

### ● 啓発活動の繰り返し

全体の40.6%の保護者が「普段から環境を守るためにしていることがない」とアンケートで回答していたことから、環境保全の取組や学校の取組をお便り等で紹介した。発信をした学級は、全体の72.7%を占めたものの、家庭版環境ISOの取組やエコ新聞の発行等の学校全体の取組が、単発的な取組で終わってしまったことがあげられる。学校全体での環境保全に対する啓発と取組を継続していく必要があったことが考えられる。学校から家庭へ発信を繰り返し行っていくことが、今後必要である。

→ 方向③ 家庭啓発

## 3 まとめ

研究を通して、環境教育に対する児童・職員の意識は少しずつではあるが向上してきている。実際、水俣に行き、現地の取組を学ぶことを通して、学校だけでなく、家庭や地域のなかに環境の文化が浸透していることを学んだ。今後、七城の豊かな自然環境を未来につなぐために、家庭や地域をまきこんだ環境教育をどのように推進していけばよいのかを模索していきたい。

子どもたちが「七城をどれだけ好きになるか、自分のお気に入りの場所を見つけ、言葉で表現することができるか」が研究の一つ目のポイントであった。また、七城の身近な環境の中にもオヤニラミ等の絶滅危惧種が生息しており、環境問題を遠い世界の問題ではなく、自分たちの身近な問題としてとらえさせることが二つ目のポイントであった。

本校の研究は、まだスタート地点に立ったばかりである。恵まれた環境の中で暮らす七城の子どもたちに、どのような手立てをとれば、切実感のある環境教育を推進することができるか。どのような取組をすれば、環境教育が特別な教育ではなく、日常的に行うことが当たり前の文化になるか。今後も研究を続けて生きたい。

## お わ り に

今年は記録的な猛暑や経験したことのないような豪雨が国内の至る所で見られ、自然の驚異をまざまざと見せつけられた1年でした。自然は私たちの心に潤いを与えてくれると同時に、私たちと自然との関わりについて深く考えさせてくれるものだということを実感しました。

本校は、環境教育推進校として2年間の取組を進めてきました。育てたい力を、身近な環境や自然と人とのかかわりの理解、環境や自然を大切にする心、進んで環境を守りよりよい環境を創造しようとする実践的態度とし、環境に関する「感性を育てる」教育の営みを行ってきました。

視点を明確にし、七城町のよさを味わうような「ななしろ」型環境学習で、児童はあらためてふるさとの自然環境のすばらしさを感じ取り、そこに地域で活動する人々の姿も学ぶことができました。本校の米作りは、「米作りを教えるのではなく、栽培を通して人づくりをしている。」という栽培委員の方の言葉が、そのことを物語っています

さらに、発達段階に応じた幼保等、小、中の連携も豊かな環境教育の礎でもあります。幼い頃から、自然に親しみ、自然とふれあう活動をし、幼保等、小、中で連携する子どもたちの交流活動は、人と人との関わりを深め、思いやりや優しさを育てることにつながっています。

しかしながら、あまりにも恵まれた環境の中で暮らす児童・職員・保護者にとって環境問題はあまりにも遠く切実感を感じられない状況にありました。その課題の払拭に向け、取り組んだ「水俣に学ぶ肥後っ子教室」の学校あげての取組や「学校版・家庭版・地域版環境ISO」の工夫等は、少しずつ成果をあげています。特に、5年生の水俣市立袋小学校との交流学习は、これまでの児童の取組を深く見つめ直させてくれる上で大きな効果をあげることができました。

「家庭版環境ISO」の取組も、多数の保護者が家庭での環境問題についての見直しに役立つことができたと答えており、学校・家庭・地域の連携を進める上で大切なものであると感じています。

この2年間の取組で、児童の知的理解、心、実践的態度は、わずかではありますが高まってきたように感じます。

今後、さらに研究を深め、児童の豊かな感性を育む環境教育を職員一丸となって継続していきたいと思っています。本校の研究に際し、多くの示唆を与えていただいた関係者の皆様に感謝の気持ちを抱きながら、結びの言葉といたします。

平成25年11月8日

菊池市立七城小学校 教頭 羽根田 祐一

### 【研究同人】

緒方登志子	羽根田祐一	服部 厚子	菊川 芳郎	渡邊 鎮子	井野 信子
益崎 英子	楠田 陽子	上田 桂子	田中 英祐	賤津 里美	星子 知美
小松 元樹	佐々木 悠	堺 美由希	北原 博明	高宮ゆかり	堀田 大
鮫島 香織	河内 沙織	宮本 夏美	鳥飼こずえ	築地 法子	松野 里英
松原 倫子	永田 知絵	今吉 信	宮本 紫		

### <平成24年度>

東 光洋	宮本 和史	長野 邦彦	豊田 裕子	堤 尚子	仲田 知子
田邊 愛子	下田 潤一	吉岡 友香	杉谷 敬	坂田 光	北島 佑
古里 恭子	家入真理子	樺 浩美	平田 絢香		

《参考文献》

- 小学校学習指導要領解説 総則編 (文部科学省)
- 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 (文部科学省)
- 小学校学習指導要領解説 道徳編 (文部科学省)
- 小学校学習指導要領解説 音楽編 (文部科学省)
- これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック (時事通信社)
- 環境教育指導資料〔小学校編〕 (国立教育政策研究所)
- 持続可能な開発のための教育 (ESD) の理論と実践 (ミネルヴァ書房)